

『アメリカ大都市の死と生』を読んで

飯島 康夫

アメリカは現在、大統領トランプの台頭によって自国中心主義、移民反対の過激な発言を繰り返してきた。戦後、IMF等ブレトンウッズ体制の確立にみられる多国間主義から一転して、内向きに変わるかのような印象を与える。最も過激な表現は、メキシコとの国境間に壁を打ち立てるというものである。また、在日米軍の維持に相応の負担を日本政府に求め、核武装まですすめるといったものまである。富裕な不動産王で敏腕ビジネスマンであることは間違いないが、政治家としての能力は全く未知数と言ってよいであろう。

建国以来、アメリカは移民に対して相対的に寛容な国であった。それが不寛容になりつつあるかのように見える。冷戦後の一時期、アメリカ人勝ちという現象、あるいはパックス・アメリカナという現象がここにきて国際関係上、覇権国家ゼロの状態を映し出しているのが現代に生きるわれわれの世界なのかもしれない。1990年代から2000年代初頭にかけて、冷戦後の世界は現在、死語となった「グローバリゼーション」の下に米国標準のヒト、モノ、カネ、情報の面で規制緩和するという新自由主義が横行していた。シカゴ大学の学者の著作もサスキア・サッセンなどに代表される「グローバル・シティ」に注目があつまったこともある。「世界標準化」に反転して自国中心、国家の逆襲かのようにみえる現在においては、隔世の感を否むことができない。リーダーシップをとる国がほぼ見当たらない状態で、21世紀に住む私たちは、一時は「アメリカンドリーム」の国」といわれたこの米国に対してどのように向き合っていかなければならないのであろうか。つまり、情報の断片に一喜一憂することなく長いスパンでどのようにしてこの国に対して、理解をすれば良いのであろうか。

昨今、エマヌエル・トッドが旧ソ連邦の崩壊、英国のEU離脱、そして今回のトランプ氏の勝利を

先読みしていたことで話題に上がるが、仮に何らかの学びが単に一定期間の時事批評に墮するものであってはならないと稚拙ながらに思われてならない。時の流れ、風雪に耐えうる何らかの知見こそが今、必要とされているようにみられる。

さて、本稿ではジェーン・ジェイコブスによって著された書物『アメリカ大都市の死と生』を紹介したいと思う。この本は、アメリカ都市社会について描いた有数の古典である。ジェーン・ジェイコブス女史は、机上の空論に陥りやすいアカデミックな理論家ではなく、ニューヨークのダンタウンに住み都市問題を観察しつつも、行動に移した実践家であった。彼女は、いわゆる、専門家が集まり議論しながら既定の理論に沿って行われる官僚的な大規模な再開発を阻止してみせた。官僚やテクノクラートが行う再開発はアメリカ大都市の死をもたらす。狭い専門領域に視野が限られた玄人のこのようなアメリカ大都市の再開発は例えば、次のようなものである。既存の建物を一掃し、スラムを撤去してしまえば、一見、美しい高層の都市と広いオープンスペースを確保することができるのであり、これは都市を専門的に取り扱う者誰もがまずなすべきことであると。しかし、彼女が一介のアマチュアながらも、ためらわずに提案、実践するのは現場に住み生活する人間の側から突きつけられるものである。英文の原書が刊行されたのは、1950年から1960年にかけてのアメリカ経済の絶頂期にある。しかしながら、邦訳が出たのは比較的最近で2010年であり、2015年12月30日第6刷を刊行している。現在でも、数々の人達がアメリカの大都市再生のためにジェーン・ジェイコブス女史の古典にたちかえって知恵を借りようとしている。トロント大学の教授リチャード・フロリダは人口500万から1億人規模で人々の創造性が駆使され経済的な生産が数兆ドルにも及ぶ「メガ地域」を想定している。

この「メガ地域」は複数の大都市から構成されており、北米の「メガ地域」の幾つかを例示すると、東海岸のボストンからニューヨーク、ワシントンDCに至る約800キロメートルに及ぶ。ボストンはバイオテクノロジーや教育、ニューヨークは金融サービス、ワシントンDCはメディアなど高度に発達した産業に支えられている。このほか、南部にはロサンゼルスからサンディエゴを経てメキシコのティファナに至るカリフォルニア南部の「メガ地域」がある。ロサンゼルスは映画産業、ITの集積地であり、サンディエゴはバイオ、通信技術、そして、ティファナはハイテク産業の栄える街である。中南部にはテキサスのダラスの強みである陸上輸送、メキシコ北部と国境を接するサンアントニオ、そして州都オースチンの政治的機能が合わさった「ダルーオースチン」（この「メガ地域」は人口1000万人、経済規模は3700億ドルである）、さらにはヒューストンからニューオリンズにかけての広大なエネルギー資源地帯「ヒュー＝オリンズ」は人口1000万人、規模3300億ドルである。例示したような「メガ地域」は北米には12を数える。ジェーン・ジェイコブズの古典はここでも生かされ、民族・人種・文化的な寛容性を大前提にして才能ある多種多様な人たちがアイデアを持ち寄って、その後に労働力や資本、技術が後から付いてくるというものである。

このほかに、美術館、オペラ、交響楽団など固定化した文化施設よりも、ストリート文化に根ざした芸術という点も現在のアメリカ社会に合致している。街路は作品の作り手と触れ合う豊かなチャンスに恵まれた場であり日常の賑わいを見せている。街路には誰か心ある人達が無数の花々を飾り、飲食しながらストリートミュージシャンの音楽に聴き入り、画廊やライブ会場などが歩道に面した人目につきやすいところにある。オープンテラス、露天商、大道芸人などが視覚的・聴覚的に歩行者の感覚に訴えてくるのである。アメリカのチャールストン・カレッジの准教授ベンジャミン・フレ

イザーも、このストリート文化について興味深い考察を行っている。ジェイコブズ女史の造語、“Sidewalk Ballet”（「街路のバレエ」）に注目して、アメリカの大都市は、静止したものではなく生きられる場所であり、複雑に絡み合った老若男女が触れ合うところであることを改めて喚起している。この造語は近隣住区ではなくて、街路を強調しモーバイルであること、偶発的・即興的な文化であること、そして、歩行者の感覚に直接に訴えるものであることがうかがわれる。生きているアメリカの大都市の特徴は、生命系のオーガニズムであり、決して役人や専門家が絵に描いた死んだ幾何学模様まがいのものではないという。常に複数の要素が秩序とカオスの緊張感にあふれているものであることも、ジェイコブズのニューヨーク市のダウntaxの観察から生まれ出たものである。彼女によれば、多様性に溢れた街路文化を守っていかなければならないということになる。

都市とは元々見知らぬものが会おうところである。そもそもアメリカの独立と建国の時代からストリート文化は商人や街路を行き交う人たちが法律や新聞記事の配布、街頭演説、種々の署名活動など政治的にも覚醒を呼び起こす原点ともなっていた。ここを出発点としてある種の帰属意識が共有されるようになったのも偶然ではないとみられる。建国当初から多種多様な人種、宗教、文化が街中を行き交い、ボストンなどではそれらを越えて市民意識を形成し大英帝国に抗する政治文化を醸成してきた。アメリカでは都市こそがダイナミック、多様性とイノベーションを促してきたところであったと言えよう。さて、本題から少し外れるが、ここでアメリカ大陸南部に目を転じてみよう。南部はカリフォルニアからはじまり、南米のチリ、カリブ諸島などと同様に、スペインの影響が強かった。ここでは、白人とインディアン、黒人の血が混ざり合い独自の文化圏を形成した。ここには、ニュースペインといわれ、既出のカリフォルニア、メキシコ、フロリダ、ガテマラ、カリブ海諸島、

また、ニューグラナダと言われるコロンビア、エクアドール、ボリビア、及びペルー、チリ、アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイなどがある。このようなイベロ・アメリカ圏では、土着の習俗、宗教、文化を尊重し混合しながら、スペイン国王への従順、ローマ・カトリックのグレゴリウス暦が導入された。

アメリカ大都市のストリート文化という本論に戻ろう。ジェイコブズの観点は、移民流入に対して非常に寛容であるばかりか、極めて複雑に絡み合った高密度の大都市部で多様性と複雑系の創発的な秩序が肝要であることを強調している。一般に専門家的な権威的な肩書きを持たない彼女は名誉学位も嫌い一市民の視点を貫いていることが印象的である。このため、米英の都市専門家に対しても、容赦ない。都市と田園の結婚、企業城下町のようなハウードの構想に対して、複雑で多面的な文化生活を無視し、大都市が自警団を形成しアイディアを自由に交換し合い政治的に動き新たな経済的な仕組みを作るという発想に欠けているとした。米国のルイス・マンフォードに対しても手厳しい。後者は、大都市の分散、街路の悪者扱い、自己完結的な近隣住区を過度に美化し、ニューヨークのミッドタウン酷評の点で間違っているとした。反対にジェイコブズは、街路とその歩道こそが高密度なアメリカ大都市の公共の場であり、その最も重要なところであると力説している。アメリカの大都市で成功した事例は他人だらけに囲まれながらも、安心し身の危険を感じる必要のない街路の安全性にあるという。多民族国家アメリカ、多文化を受け入れる器の大きさこそが本来、この国を訪れる者を魅了した要素であるが、冒頭に述べたように昨今の政治の潮流はあたかも内向きの自国中心主義と失業中の炭鉱労働者達に支えられた大衆迎合主義が表に現れようとしているかのようである。「サラダボール」としてのアメリカは偏狭な人種差別、宗教、文化等を廃して、多様性と寛容な心で様々な境遇にある人達を受け入れてきたは

ずである。

ジェイコブズは大都市の街路が粗暴行為や恐怖から安全であれば、その社会自体も安全であるとみた。少数民族や貧困者、社会から排除されている者にアメリカ社会を脅かす危険分子というレッテルを貼っても意味がない。人口100万人以上の大都市圏の例として彼女があげるのがロサンゼルス市である。ここは犯罪、特に人々が街路を恐れる原因となる個人的な攻撃と結びついた犯罪が顕著といわれている。強姦、暴行、銃犯罪の面で、最も危険な大都市の一つといわれてきている。これに対して、ボストンのノースエンド街路はイタリア系住民が相対的に多いにも拘らず、ありとあらゆる人種、出自の人々が大勢、往来していても、現金を手にしてそれを使うまでの間にそれを奪われたりしないことが多い。しかし、同じボストンであっても、インナーシティーのエルムヒル街では、夜間外出は危険視されている。

何が違うのかを判別しようとしたところ、原因は既述のように住民が犯罪者ばかりであるとか、被差別者、貧困者が多いというところからくるものではない。幾つかの条件がアメリカ大都市社会の安全を担保していることがわかる。まず、公共空間と私的空間の区別がはっきりとされていること、第2に住民と見知らぬ人々の両方の安全を保証できるような街路に面した建物と歩行者に対する見守りの目が行き届いていること、第3に歩道には利用者がかなり継続的にいて街路での活動に楽しみを見いだすことのできるような状態でなければならない。歩行者、住民が相互に見守りを怠ることのないような状況である。アメリカのストリート文化は街路を大いに利用して楽しみ、歩道沿いに洒落た店舗や公共の場があちこちに散在していることが重要である。各種の商店、酒場、レストランやカフェなどがそれぞれに複雑に絡み合い、街路の往来の安全性を確保するというのが肝要である。ジェイコブズの地元であるニューヨークでは、活気のある街頭で、雑用で往来する人や

遊ぶ子供達、大道芸人などで溢れ、賑わいを見せてアメリカを代表する大都会の活発な姿を見せてきたという。反対に閑静な高級住宅街の中に行政が押し付けてつくったコミュニティ・センターも、実際のところ、多種多様な趣味嗜好や性癖といったニーズに応えておらず絵に描いた餅のようなものに過ぎない。シカゴではシカゴ大学に隣接する地域は高級な住宅街であり、広々とした公共空間に恵まれながらも、空き巣その他の路上犯罪に悩まされてきた。このようなシカゴ市も、各種の犯罪組織が縄張りを持っている場合がある。官製のお堅い「都市計画」ではアメリカの大都市圏の何がポイントであるかを把握していないことが多いといわざるをえない。ジェイコブズがあえて、街路の賑わいを的確に表現する上で「街頭の踊り」と称したのは次のような状況を指している。つまり、アメリカの古い都市がうまく機能しているとするならば、街路の治安をはじめ、各種の複雑な要素が受け入れられ、歩道利用の往来とそれを見守る人、街頭に面した中小の店舗の経営者たちが複雑に絡み合うばかりか、絶えず街中の暮らしに彩りを添え、ある種の芸術、特に踊りになぞらえることができるとしている。これは、画一的に全員が一斉に揃って動くような単調なものではない。ひとりひとりの踊り手、あるいはアンサンブルが持ち前のパートを担い、それぞれの担い手たちがお互いに共鳴し合い、秩序だった全体を構成するような複雑かつ即興的なバレエのようなものである。ジェイコブズの住むニューヨークのハドソン通りは、その良い事例であって、ここでは、毎日複雑な歩道バレエの舞台となっていたようである。朝、音を立てながらゴミ出しに街路にでると、その横を子供達がガヤガヤとそぞろ歩き、隣の住人が洗濯物を干すなど、ありとあらゆる異なった生活リズムの音や賑わいを見せるということに注目している。顔を合わせるようなことがあれば、会釈するようなこともあるであろう。午後、仕事を終えて帰宅するときの街路の様子は、街路のバレ

エはクレッシェンド、最高潮に達し、子供達がストリートバスケ、ローラースケート、三輪車乗り、お気に入りの人形遊びに打ち興じ、各種の運送屋や郵便配達人が荷物や配達品を届ける時間になる。ティーンエイジャーが騒ぎ、若い娘たちが車から降りてくる音など、ハドソン通り一帯が黄昏時を迎えるにつれて、街灯が次々とつき、ビザ屋、コンビニ、雑貨屋、レストランなどのところでスポットライトを当てたかのようにどんどんと順番に明るくなっていく。このような生活リズムを表象するバレエが街路を舞台に複雑かつ活き活きと演じられるのが常であるといわれる。暮らしはこのようにアメリカ大都市の社会に、様々に彩りを与え、常に活気を与え続けているものであるという。ジェイコブズの見たニューヨークのダウントウンの街路では、大前提として相互の信頼があり、地元住民の何気ない会話その他の交流を総和したものが日常生活に溶け込んだものであり、突発的で、ささやか、さりげないものながらも、相互の尊重と信頼の基となっているという。非公式の公共生活を前提に、ひとりひとりのプライバシーが守られ、お互いにほど良い距離感を保ちながら自分と異なるあらゆる人々と知り合いになれるのがアメリカ大都市のストリート・カルチャーの美点であるとされる。ここでは人種、貧富、老若男女の違いよりも、ずっと深遠な寛容さが保たれていると主張されている。さらには、子供達の見線からしても、偶発的な遊びを管理したがる大人たちと活気や冒険心に満ち溢れた街路で遊びたがる子供達とは相容れないものがある。

ジェイコブズによれば、アメリカ大都市社会の良さととは、住民にとって選択肢が幅広くあることと密接な関係がある。互いの関心を共有できる可能性を持っていることをベースに、コミュニティを築くこともできるという確信を得ることができるといふ。これは、決してある特定の民族的背景、宗教、貧富の差を基盤とする必要性は全くない。アメリカ大都市の都市景観を支えているのは、異

なる人々が複雑な生活様式で絡み合い、違ったことを違った理由で違った目的を念頭に実践しようとしている多彩な面であり、即興の演劇、即興大道芸人的な音楽の響きと同じく、建築群においても、人間に活気と彩りを与えるのはそれに関与する人々のバリエーションの豊かさである。今日、人々が忌み嫌う葬儀屋も、聖職者、医者などと同じくその尊厳を保っており、豊富に多様化したアメリカ大都市社会の一部である。

参考文献

ジェイン・ジェイコブズ著（山形浩生訳）、『アメリカ大都市の死と生』、2010年、鹿島出版会

Sonia Hirt and Diane Zahm eds (2012) , *The Urban Wisdom of Jane Jacobs*, Routledge

Adam Zamoyski (1999) , *Holy Madness : Romantics, Patriots and Revolutionaries*

Benjamin L. Carp (2009) , *Rebels Rising : Cities and the American Revolution*, Oxford University Press

(いいじま・やすお 聖学院大学政治経済学部政治経済学科教授)